



Title	藤井治彦先生のスポンサー研究について
Author(s)	足達, 賀代子
Citation	Osaka Literary Review. 2019, 57, p. 105-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71982
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤井治彦先生のスペンサー研究について

足達賀代子

1 はじめに

たいへん残念なことに、私は藤井先生にご指導頂く機会に恵まれなかった。平成10年の秋、私は阪大の文学研究科の受験を志した。その頃私は英文学の研究とは縁遠い世界に身を置いていたが、学生の頃に夢中で読んだエドモンド・スペンサーの詩が忘れられず、もう一度勉強したいという気持ちが高まったためである。12月に入りしばらくしてから藤井先生のご逝去を知った。幸い入学を許された翌年4月、学内には先生への敬愛と追慕の情が満ち満ちていた。石田先生のお部屋の書棚には藤井先生のお写真が一段高いところに大切に守られていたし、先生方、先輩方はいとも慕わしげなご様子で藤井先生のことをお話しになるのが常だった。藤井先生の思い出を共有できないことは淋しかったが、私にはそれに代る楽しみがあった。新入の修士1回生に課せられる初めての試練は「書評」と呼ばれる談話会での発表である。大学卒業後、英文学研究から暫く離れていた私は、「書評」の準備のため約400年間にわたるスペンサー文学の研究書、批評書を急いで集める必要があった。図書館から制限冊数一杯の本を借りてはひたすら読むという日々を送っていたところ、「藤井蔵書」の印が押された本が多くあるのに気付いた。時折、それらの本のページの余白に、先生が書き込まれたと思われるメモ書きを見つけることがあった。細く端正な鉛筆書きで、単語の意味や短い覚え書き、時にはクエスチョンマークが付されてある。その文字達は、先生と著者との間の対話の断片であり、先生の思索の時間の痕跡である。かつて先生も読まれ、思索をめぐらされたのだと思うと、心が折れてしまいそうな難解な本や論文も、読み進め、

考え続ける勇気が湧いてきた。ご存命中に直接ご指導を仰ぐことは叶わなかったが、「藤井蔵書」を介して先生は私をお導き下さったのだと思う。先生への感謝の思いは尽きることがない。

2 藤井先生のスペンサー関係の著作

藤井先生の20回忌にあたる平成29年、第50回阪大英文学会において「シンポジウム・藤井治彦」が開催され、先生のスペンサー研究についてお話をさせて頂けることとなった。そこで、『藤井治彦先生退官記念論文集』（英宝社、2000年）に掲載されている先生のエッセイ“Remembrance of Things Past”に添付されている「著作目録」を頼りに先生のスペンサー関連の著作をピックアップし（文末表参照）、自分が所蔵している何点かを除く全てを発刊当時の形でコピーし、あらためて拝読しようと思った。大部分は阪大図書館でコピーを入手することができたが、所蔵されていないものについては京阪神一円の大学図書館を訪ねた。上記「著作目録」で確認するかぎりでは初めて活字となったスペンサー関係のご論考は、1966年8月発刊の『季刊英文学』に掲載の「牧人コリン・クラウトの時間感覚」である。当時の紙の色なのか経年変化によるものなのか、紙面は薄茶色く、旧字体もちらほら混じっている。このご論考はスペンサーの『羊飼の暦』（1579）や『妖精の女王』（1590、96）などに登場する羊飼の詩人コリン・クラウトに見られる時間の感覚を扱ったもので、後に先生が博士論文としてまとめられ、1974年5月、英文で出版された *Time, Landscape and the Ideal Life: Studies in the Pastoral Poetry of Spenser and Milton*（京都、あぼろん社）のいわば萌芽をなすものである。以降、最後のスペンサー関係の著作と思われる1999年5月の「食べること・飲むこと——スペンサー、ジョンソン、ミルトンの詩におけるその規範と逸脱——」に至る34年間に、先生は英語、日本語合わせて約40ものスペンサー関係の著作を発表された。学術書、論文、注釈、解説、翻訳、書評、事典記事、エッセイな

どその種類は多岐にわたり、主題や内容も豊かな広がりを見せている。スペンサー研究に対する先生の大きなご貢献を限られた紙幅で十分にたどることは不可能だが、本稿では、その一端でも振り返ってみたい。

なお、今回、活字の形で入手できる先生のスペンサー関係の著作をあらためて読破するという初志を貫徹するため、先生が『ルネッサンスニュース』（上智大学ルネッサンス研究所）に寄せられた「会員だより」や *The Browser*（大阪洋書発行の図書案内）に寄稿された書評なども取寄せて拝読した。古い号であるにもかかわらず速やかにご対応下さったルネッサンス研究所のご担当者、そして大阪洋書社長の川久保様にこの場を借りてあらためて御礼申し上げます。特に川久保社長は往時を懐かしまれ、藤井先生が同書店に笑顔で立ち寄られる折のご様子をまるで昨日のこのようにメールにつづって下さり、気さくで明朗闊達な先生のお人柄が偲ばれた。私は夏の朝の輝きと風の爽やかさを思った。

3 日本及び世界のスペンサー研究への貢献

エドモンド・スペンサー（1552-99）は英国エリザベス朝ルネサンスを代表する詩人の一人である。上記2作の他、『アモレッティ』（1595）、『祝婚歌』（1595）、『プロサレイミオン』（1596）、『四つの賛歌』（1596）など多くの作品を残し、「詩人の王」、「詩人の詩人」と呼ばれた。ルネサンスの知識人らしい古典の豊かな教養と宗教的、哲学的思念、そして政治的感覚を巧みに盛り込んだ作品は、整然たる脚韻を用いた「スペンサー連（Spenserian stanzas）」や豊饒なアレゴリーの他、様々な詩的手法が駆使され、後の英文学に与えた影響は大きい。没後も『羊飼いの暦』や『妖精の女王』を中心に版が重ねられ、詩人や知識層に愛読された。その後の評価は毀誉褒貶様々であったが、次第に主著『妖精の女王』でさえ長大さと難解さのために敬遠され、学問的研究も少なくなった。転期が訪れたのは1960年代である。全作品のテキストを整理し、充実した注釈と研究・批評動向や

論考が盛り込まれた Variorum 全集の刊行 (Johns Hopkins University Press, 1932-57) を機に、A. C. Hamilton ら多数の学者が次々に注釈書や研究書を著し、ほどなく *Spenser Newsletter* (1970 年創刊。The *Spenser Review* と改名。現在は *Spenser Online* にて配信) が発行されて研究動向や書評が紹介され、また、1980 年には、学術誌 *Spenser Studies: A Renaissance Poetry Annual* の刊行も始まり、厳しい査読を経た論文が掲載された。藤井先生が UCLA に留学された 1964 年から 65 年は、この新たな黄金期の真っ只中であつた。“Remembrance of Things Past” には、先生が UCLA で『妖精の女王』に包括されているルネサンス期イギリスの知識人が知悉していた文学の形成要素を学ばれ、それがご研究の出発点、考え方の基盤となったとある (1012)。このような刺激的な時期に留学され、ご研究の基礎を修得して帰国された先生が、日本の、そして世界のスペンサー研究の旗手となられることは当然の成り行きであつた。

ご帰国後、『羊飼の暦』に見られる牧人達の時間感覚についての一連のご論考を発表され、その成果を博士論文にまとめられるかたわら、先生は日本のスペンサー研究の促進のため多大の貢献をされた。『英語青年』に掲載・連載された一連のご論考 (「Spenser の Graces」(1968)、「*Prothalamion* 訳読」(1974)、「Phaedria の誘惑——*The Faerie Queene*, 2. 6. 2-38 について」(1978)、「スペンサー演習——*The Faerie Queene*, 1. 1. 6-28——」(1)-(4) (1980)) は、いずれも深い洞察と独自の解釈による優れた学術的貢献であると同時に、スペンサーのテキストの読み方を指南し、1960、70 年代の世界のスペンサー研究の動向と成果を伝えるものであつたことを忘れてはならない。そのような意図をお持ちであつたことを先生ご自身、次のように述べておられる。「『スペンサーをどう読むか』という問に答えることを念頭において、……1957 年の Variorum 版全集の完成以後、特に 1960 年代、70 年代の 20 年間にかなりの量のスペンサー研究が蓄積され、新しい注釈もいくつか現れているので、その内容の一斑を

詩のテキストに即して伝えるころみがあってもよいのではないかと思われる……」(「スペンサー演習 (1) —— *The Faerie Queene*, 1. 1. 6-28」[137])。いわば誌上スペンサー講義であり、先生のご講義を直接拝聴することが叶わなかった私にとってこれほど有難いものはない。今日スペンサー研究を行っている先生方の中にも、研究の根幹となる知識や考え方を誌上で、また教室で先生から学ばれた方も多いことだろう。その意味で先生が日本のスペンサー研究の促進に果たされたご貢献は非常に大きいのである。

先生はまた、日本スペンサー協会の設立と発展にも大きく尽力された。協会では先頃、設立 30 周年を記念して英文論集 *Spenser in History, History in Spenser: Spenser Society Japan Essays* (Osaka Kyoiku Toshō, 2018) を刊行したが、その緒言には藤井先生の功勞に感謝を表する次のような言葉がある。“At the suggestion of Yuichi Wada, and with a special effort of Haruhiko Fujii, the Spenser Society of Japan (SSJ) was formed in 1985” (iv-v)。協会の末席を汚す者として、先生のご貢献への感謝を胸にこれからも精進し、スペンサー研究の発展のお役に立ちたいと願うばかりである。

藤井先生は日本のスペンサー研究にとって世界への窓口でもあった。先生は、*Spenser Newsletter* への寄稿を通じて、また、*The Spenser Encyclopedia* (Toronto: University of Toronto Press, 1990) に収録された “Influence and Reception in Japan” という項目の中で、日本のスペンサー研究を世界に紹介して下さった。このことが日本のスペンサー研究者にとってどれほど大きな誇りと励みとなったことであろう。なお、*The Spenser Encyclopedia* の刊行は Variorum 全集以来の研究史上最大のプロジェクトであり、世界中の高名なスペンサー研究者が共同執筆したのだが、先生は上記項目の執筆のほか、編集委員として編纂に参画された。このことは先生が当代最高のスペンサー研究者の一人であることの証である。翌 91 年にはスペンサー国際学会でセッションの司会の大役を務められ、その様子を『英

語青年』に寄稿されるなど、世界の状況をタイムリーにお伝え下さった。数々のご功績と高い国際的評価により先生は上述の *Spenser Studies* の編集委員に迎えられた。毎年投稿される多くの論文を査読され、世界のスペンサー研究を指導する立場に立たれたのである。日本のみならず、世界のスペンサー研究のレベル向上に対する先生のご貢献ははかりしれない。

4 「時」と「生き方」

留学から帰国後、先生は1966年から73年にかけて精力的に発表されたスペンサー、ミルトンのパストラル文学に関するご論考を博士論文としてまとめられ、1974年、*Time, Landscape and the Ideal Life: Studies in the Pastoral Poetry of Spenser and Milton* を出版された。同書の内容を『羊飼の暦』についての考察に絞ってごく簡単に記すと、『羊飼の暦』を構成する12の eclogues は E. K. なる注釈者（誰を指すのかまだ解明されていない）によって “recreative,” “moral,” “plaintive” に三分類されているが、藤井先生は古典のパストラル文学の伝統を丁寧に踏まえながら、これら三分類の各々に特徴的な「時」の観念と羊飼達の生き方が見られることを指摘された。この著作は日本のみならず海外でもスペンサー研究者達によって高く評価され、先生の国際的令名の礎となった。例えば、御輿員三先生は『英文学研究』（1974）でこの本を取り上げられ、スペンサー及びミルトンの「牧歌的特色を明らかにしようとする労作」であると評されている。また、上述の *Spenser Newsletter* は第6号（1975）に高名なスペンサー学者である Donald Cheney 教授による書評を掲載し、“Professor Fujii has developed an original and interesting thesis which serves him well in examining the pastoral works of Spenser; and he writes with a lucidity and grace that many western Spenserians might envy.” と高く評価している。さらにこの書は、『羊飼の暦』の「時」の観念を考察する際の必携書とされ、例えば Richard A. McCabe 教授は *The Pillars of Eternity: Time and*

Providence in The Faerie Queene (Dublin: Irish Academic Press, 1989) 中、
“*The Shepherdes Calender* introduces us to a poet preoccupied by the passing of the years, morbidly conscious of how life and happiness are slipping away.” (20) と述べた箇所に“See also Haruhiko Fujii, *Time, Landscape and the Ideal Life: Studies in the Pastoral Poetry of Spenser and Milton* (Kyoto, 1974), pp.32-65.”と脚注を付している。McCabe 教授は *The Oxford Handbook of Edmund Spenser* (2014) の編者を務められた碩学である。さすがに慧眼と申し上げるべきだろう。

人間は生ある限り「時」に支配され、様々な「変化」にさらされている。「時」の支配の中で如何に生きるべきかは、ルネサンスの人々の大きな関心事であった。この間は、有限の生の中で「時」による支配をどう克服するのか、という問題意識と表裏一体である。先生は引き続きこの問題に取組まれ、1976 年のご論考、“A Reading of Spenser’s *Prothalamion*” で一つの答を示されている。第4代ウスター伯の双子の令嬢の婚約を記念して『プロサレイミオン』は献呈された。祝婚(前)歌の伝統に則し、この詩でも実り多い結婚生活が予祝されるが、結婚生活の円満と調和は現実には不確かで脆いものであり、破壊者としての「時」の支配を否応なく受けることが、移りゆく「時」を表すテムズ川の流れによって暗示されている。白鳥に姿を変えた2人の乙女が無垢な「夢の世界」を後にし、川を下って争いや不和と労苦の多い結婚生活の「現実」へと向かう。これは「時」の暴虐である。だが、「芸術作品の永遠の力により時の暴虐は乗り越えられる」(59) との思いが詩人に「少なくとも自らの詩的世界を創造している間だけは永遠の秩序を垣間見たい」(同)と望ませる。せめてこの詩が続く間は彼女達の「夢の世界」が続き、「時」の支配を超克できるように、という思いを込めて語り手の詩人は「静かに流れよテムズ川、我が歌を終える時まで」というリフレインを繰り返すのだ、と先生は結論づけられた。この詩は「変転する日常の時間の流れの中に出現する、時間を超え

るかのごとき祝祭のヴィジョンを詩の形において定着させる」(『*Prothalamion* 訳読 (1)」[308]) 試みなのである。

1987年の「叙事詩における「時」の克服——スペンサーとミルトン——」では、まず、「時」の支配を超克するためにスペンサーが提示した思想が考察されている。それは、「歴史の連続性」、「魂の循環」、「万物の素材の連続性」、「無常の中の永遠」、そして「時が終わり、一切の変化が停止した永遠」などである。だが、これらはいずれも、今、有限の生を生きている人間の「内的な体験としてではなく、……外在するもの」(35)である。そこで先生はミルトンへと目を転じ、Frank Kermodeの *The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction* (New York: Oxford University Press, 1966) を引きながら、「カイロス」と「クロノス」という二種類の「時」の観念を考察される。「クロノス」が始まりから終末へと継次的に「過ぎゆく時」なのに対して、「カイロス」とは「意味に満ちた時」、「その瞬間に過去、現在、未来が切り離しがたく結びついている時」をいい、この「カイロス」を生きるとき人は有限でありながら「時」を克服し、永遠はその人の体験として内面化される。「カイロス」を生きるとは人が自らの自由意志と責任において行動を選び取ることをいう。例えば『楽園喪失』で、墮罪したアダムとイヴが、恩寵による心の促しはあったにせよ罪を認め改悔を決めたのは彼らの自由な行為であって、この選択の瞬間が彼らの過去と未来の意義を変えた、と先生は説明されている。先生は、『妖精の女王』の騎士達はアレゴリーの枠により取るべき行動が予め規定されているので、自らの自由意志と責任で行動を選び取ることが少ないと言われるが、上述の「カイロス」に関するお考えに照らせば、私は、第1巻第9篇で自らの罪深さに絶望した赤十字の騎士がまさに命を絶とうとするその瞬間、神の慈悲を説くユーナの叫び声に彼がナイフを投げ捨て、立ち上がって彼女とともに立ち去ったその瞬間が「カイロス」ではないかと思う。この瞬間に彼は神の慈悲を選び取り、自己の本質を見出すの

だから。この点について先生のご教示を仰ぐことができないのは残念である。ともあれ、このご論考により、「時」と「生き方」をめぐる先生のほぼ20年間にわたる探求は、ひとまずの着地点を見出したように私には思われる。

5 「世界のありよう」と「生のアレゴリー」

もう一つ、先生のご関心の中で大きなウエイトを占めていたのはスペンサー文学における「世界のありよう」だったのではないだろうか。それは、物事や空間、思考や観念の“juxtaposition”と先生が表現される「ありよう」である。それは、絶対的な何かを中心とした unity ある秩序世界ではなく、2つ以上のしばしば相反する要素や価値観が並立しながら重なり合う、複合的で重層的な世界の「ありよう」である。スペンサー文学のこの特質について、先生は、1969年の「Spenserの信仰」というご論考において、『妖精の女王』第1巻第10篇の赤十字の騎士と老見神者「観想」との対話を考察され、スペンサーは「現象的存在である人間が純粋な形相を求める憧憬」(697)としての「観想」とともに、「常に行動(善行)の必要を感じ」(同上)、これら異質な二つの方向性の「統合」を目指したと結論された。だが、80年代以降のご論考においては、異なる要素や価値観の「統合」、「統一」よりも「並置」される「ありよう」に焦点が置かれている。1982年のご論文“Juxtaposition of Ideas in *The Faerie Queene*”では、「スペンサーは二つの選択肢の各々が価値を含むことを認めていたのだ。それ故、彼は二つ以上の考え方や判断、またキャラクターを並置し、それぞれにメリットとデメリットがあることを示したのである」(72)と述べられ、作品中から幾つも例を挙げられた。そして、Northrop Fryeの *The Return of the Eden: Five Essays on Milton's Epics* (Toronto: University of Toronto Press, 1976)における所説を引きながら、百科全書的とも言える様々な知識や価値観の並置が叙事詩であり寓意的ロマンズでもある

『妖精の女王』の特質をなすことを説明され、「多様性が並置される世界のありよう」を見せ、そこから選択する難しさを示すとともに、このような「世界のありよう」を認めることは「人間の理性を信じ寛容を是として狂信的独善性を避けるヒューマニストの態度」(82)であることを読者に教える意味があることを説き明かされた。1992年の「スเปนサーとマローウ」でも同趣旨のことを述べておられる。繰り返しになるが、先生の表現がいつも美しいので是非記しておきたい。『妖精の女王』は、マローウの「ヒアロウとリアンダー」が「ただただ、ひとつの情念(欲望)に支配された男女の姿」(57)を描き、鉱物や宝石のような「硬質の透明感」(60)をもつのに対し、多様で複雑な意味が並置され重なり合い、あたかも「ヴェネチア派の絵のような軟らかな光の射す薄暗い空間」(60)の「金糸の隠微に輝くタペストリー」(同上)のような「濃淡と陰影に富む世界」(54)を創りだしているのである。

1990年の『『妖精の女王』における構造の形成／隠蔽』は、1997年、日本スเปนサー協会の結成10周年記念論集『詩人の王スเปนサー』にも再録された重要なご論考である。ご発想の萌芽は1977年の「*The Faerie Queene*, Book I——物語としての特色」に見出される。77年のご論考では『妖精の女王』第1巻の複雑でめまぐるしく変転していく主筋と複数の副筋を赤十字の騎士、ユーナ、デュエッサを中心に図示を試みられたが、物語の「場所の位置関係を推定し、一枚の整合的な地図を作ることは不可能であろう。この詩の光景は夢の世界のように、論理的な脈絡のないままに浮かんでは消えてゆく」(100)、また、「時間もまた、ひとつの統一ある全体を作っていない」(同上)と述べられた。ここで「時間」や「場所」、「人物の移動」を軸に先生が解明しようとなさったのは、90年、97年のご論考の主題となっている「構造」に他ならない。先生も言われるように『妖精の女王』は「エピソードの巨大な集積のような詩」(1997年、35)である。これらのエピソードは、一見、論理的脈絡を欠いた夢の世界のよ

うに見えるかもしれないが、実は主人公とその同伴者（例えば赤十字の騎士とユーナ）の「結合」「分離」「再結合」という基本的構造が見られることを示された。その上で、先生は、個々のエピソードの完結感が希薄なままに新たなエピソードが始まり、先へ先へと進んでいくために、その基本的構造が見えにくいことを指摘される。つまり、『妖精の女王』においては、「ひとつの構造がその力を保とうとしながら、絶えず他の力によって、その構造を破壊され、隠され、しかもまた、ふたたび似たような構造を作ろうとするという、いわば構造の形成と隠蔽の波動を果てしなく繰り返している」(36-37) ののである。では、『妖精の女王』のこのような「構造」の特色自体はどんな意味を持つのか。先生はそれを「人の生のアレゴリー」であると捉えられ、次のように説明されている。人は人生においてひとつの完結形を目指して、すなわち生きることにもずから選んだ自律的な構造を与えようとして、計画し、努力するが、人は完全な自律的存在ではない故に、自らの内外の様々な力によって生の構造を崩され、変形することを余儀なくされる。だが、それでもなお、人は自分の生き方を再構成し、ふたたび完結性を与えようとする。人はその繰り返しの中で生きていく。先生は、『妖精の女王』の「構造」の特質がもつ意味をこのように「解釈」されたのである。

ここで先生は、「意味を問うこと」の意味を次のように述べておられる。「意味を問うということは、解釈の問題に入ることであり、読み手の物語を語るということである」(34)。この言葉を援用して考えるに、先生が『妖精の女王』の「構造」が形成と隠蔽を繰り返すことの意味を問い、「人の生それ自体とアレゴリカルな相同体をなす」(37)と「解釈」されたということは、『妖精の女王』というテキストの「ありよう」を「先生ご自身の物語」として語られたということではないだろうか。テキストが並んだ文字と空白の延々たる羅列からなるとすれば、その羅列を最初から最後まで追うことは Kermode の言う“tick”と“tock”の間の“simple chron-

icity, ... the emptiness of tock-tick, humanly uninteresting successiveness”

(上掲書 46)、すなわち「クロノス（過ぎゆく時）」の経過にただ身を委ねることに等しい。物語の作者はこの「単なる継続としての時」を現在の認識、過去の記憶、そして未来への期待を結束させる「カイロス（意味をもった時）」に作りかえる（transformation）のである。そうすることで“tick”と“tock”の間は「登場人物自身の物語（his story）」となる。テクストの読者が“tick”と“tock”の間の「物語」の意味を問うとき、何か特権的な唯一絶対の答えがあるのではなく、可能な選択肢の中から自ら選ぶのである。作者が呈示する「物語」すなわち「意味を持った時」をどのような「意味」に解するのかは、読者一人一人の選択である。意味の選択をする時、「物語」を読むことは読者にとってただ字面を追いながら過ぎゆく時（クロノス）ではなく、それまでの読みとそれからの読みを結束する特別な意味を帯びた時、すなわち「カイロス」となる筈だ。みずから意味を選択し、「物語」を「解釈」するとき、読者は「読者自身の物語（his story）」を紡いでいるのである。では、意味の選択はどのように行うのだろうか。先生は「理性を信じ寛容を是として独善を避けて」（1982 年、82）考え抜き、あなたの全存在をかけてあなたの自由意志によって選択しなさい、とお教え下さるだろうと私は思う。

先生は、1989 年、「新歴史主義管見」と題するご論考を発表された。新歴史主義に限らず先生は批評理論と常にオープン・マインドで向き合われ、このご論考でも Stephen Greenblatt の思想と方法を詳しく分析なさっている。その上で問を発せられている。Greenblatt が主張するように、「自己形成」とは人間に内在する自由な意志によってではなく、自己の意志によらず自己の内外から加えられる文化的状況の規制力によってなされるのだとすれば、アイデンティティの形成において自己自身はただ受け身であるのか。また、新歴史主義が普遍的人間性というものを否定することについて、確かに、かつてヒューマニズムが楽観的に主張したような形ではそ

れは存在しないだろうし、何か既成の特権的な「普遍的人間性」があるわけでもない。だが、「物語」の意味を問うとき、どの意味を選択し、どんな「自分の物語」を作るかを決めるのは自分自身であるにもかかわらず私達が作者の呈示する「物語」を理解することができるのは、私達が作者と「共通の人間性」(42)を持っているからではないのか。もし「共通の人間性」が無いとすれば私達は外国語で文学を読むことなど不可能になるのではないか。これに対して先生は次のようにお答えになる。自己が自らのアイデンティティ形成の主体であるというのは Greenblatt の言うように幻想かもしれないし、旧来の狭い普遍的人間性観は超えられねばならないが、やはり「新しい普遍的人間性」が「一つの理想」(46)としてあるのであって、それは「様々な人間的活動を通して求められるもの」(同)なのだ、と。先生のおっしゃる「様々な人間的活動」とは、人間を内外から規制する文化的状況の網目の只中にあることを冷静かつ謙虚に認めながらも、私達が自らの全存在をかけて考え抜き、自らの行動を選択しようとするものなのだろう。文学テキストに向き合われるとき、先生ご自身、そのような「人間的活動」をなさったのである。テキストの「意味」を全存在をかけて「選択」され、「解釈」を論考にまとめ続けられた。その意味で、ご論考の一つ一つが「先生ご自身の物語」であり、先生が「カイロス」を生きられた証である。「人間的活動」を行うことがそういうことなのだとすれば、先生のご研究の歩みこそ「新しい普遍的人間性」のあり方を示すものであった。

終りに

繰り返しになるが、藤井先生から直接ご指導を頂くことができなかったのは本当に残念なことである。今回、先生が残された数々のご論考をあらためて読破し、先生のご研究をたどりたいという大願を立てたが、自分がいかに無謀であったかを今、痛感している。先生が書かれたテキストを私

なりに読み、全力で考え、解釈を試みた。だが、私にとって先生は文字通り「巨人」であられる。肩に乗せて頂いて沢山のことをお教え頂いたが、先生ご自身の全体像を捉えることはとてもできなかった。だから、本稿を読まれた読者の皆様から「先生がおっしゃっていたのはそういうことではなくて、こうですよ。」とご指摘やご教示を頂くことは必至であろう。でも、それはとても幸せなことである。今はもうお聞きできない先生の言葉を皆様に再現して頂くことに他ならないからである。最後になってしまったが、先生がお心を砕き、身を粉にして礎をつくって下さったスペンサー研究にこれからも精進し、少しでも先生のご恩にお報いすることができるよう努力していくことを先生の御霊と読者の皆様にあらためてお誓いして、拙稿の結びとさせて頂きたい。

付録 藤井先生のスเปนサー関係著作年表

1966年 8月	「牧人コリン・クラウトの時間感覚」『季刊英文学』3.4: 171-83.
1968年 3月	“Spenser's <i>Astrophel</i> and Renaissance Ways of Idealization.” <i>Studies in English Literature</i> . English Number: 1-15.
7月	「Spenser の Graces」『英語青年』114.7 (7月号): 442-45.
1969年 11月	「Spenser の信仰」『英語青年』115.11 (11月号): 697-99.
1970年 10月	ロウズマリー・フリーマン著『スเปนサー』研究社(翻訳).
1971年 4月	「『牧人の暦』の閑暇」『英語文学世界』6.1 (4月号): 24-27.
6月	“Time and Colin Clout, the Shepherd.” <i>English Criticism in Japan: Essays by Younger Japanese Scholars on English and American Literature</i> . Ed. Earl Miner. Tokyo: University of Tokyo Press. 19-29.
1972年 10月	「 <i>Lycidas</i> と Spenser の牧歌」『英語英文学研究』広島大学英文学会 19.1: 34-50.
1973年 7月	「コリン・クラウトの成長——憂愁から観想へ」 <i>Oberon</i> 14.2: 2-11.
1974年 4月	「スเปนサーの竜」『村上至孝教授退官記念論文集』英宝社 135-46.
5月	<i>Time, Landscape and the Ideal Life: Studies in the Pastoral Poetry of Spenser and Milton</i> . 京都: あぼろん社.
7月	「E. スเปนサー作『羊飼の暦』熊本大学スเปนサー研究会訳」『英語青年』120.4 (7月号): 193-93 (書評).
10月	「 <i>Prothalamion</i> 訳読」『英語青年』120.7 (10月号): 308-10.
11月	「同上」『英語青年』120.8 (11月号): 380-81.
12月	「同上」『英語青年』120.9 (12月号): 424-26.
1975年 .	“A Reading of Spenser's <i>Prothalamion</i> .” <i>Poetica: An International Journal of Linguistic-Literary Studies</i> . 4: 50-19.
1977年 6月	「 <i>The Faerie Queene</i> , Book I——物語としての特色」『英語青年』123.3 (6月号): 100-2.
1978年 10月	「Phaedria の誘惑—— <i>The Faerie Queene</i> , 2. 6. 2-38 について」『英語青年』124.7 (10月号・創刊八十周年記念号): 344-45.
1979年 2月	「International Spenser Conference」『英語青年』124.11 (2月号): 613-15.
1980年 6月	「スเปนサー演習—— <i>The Faerie Queene</i> , 1. 1. 6-28」『英語青年』126.3 (6月号): 137-39.

7 月	「同上」『英語青年』126.4 (7月号): 188-90.
8 月	「同上」『英語青年』126.5 (8月号): 238-40.
9 月	「同上」『英語青年』126.6 (9月号): 283-85.
1982 年 2 月	「現代英語版『妖精の女王』物語」 <i>The Brower</i> 13: 13-14 (書評).
9 月	"Juxtaposition of Ideas in <i>The Faerie Queene</i> ." <i>Poetry and Drama in the Age of Shakespeare—Essays in Honour of Professor Shonosuke Ishida's Seventeenth Birthday</i> . Ed. Peter Milward and Tetsuo Anzai. <i>Renaissance Monographs</i> 9: 72-83.
1985 年 2 月	"Spenser in Japan." <i>Spenser Newsletter</i> 16.1: 16-19.
1985 年	「会員だより・私のルネサンス研究」『ルネッサンスニュース』5: 11.
1987 年 2 月	「叙事詩における『時』の克服——スペンサーとミルトン」『時と永遠—近代英詩におけるその思想と形象』英宝社 27-45.
1989 年 9 月	「新歴史主義管見——スティーブン・グリーンブラットのスペンサー論」『文化のモザイク・由良君美還暦記念画文集』緑書房 218-26.
1990 年 3 月	「 <i>The Faerie Queene</i> における構造の形成／隠蔽」『英語青年』135.12 (3月号): 574-78.
1990 年	"[Spenser's] Influence and Reputation in Japan." <i>The Spenser Encyclopedia</i> . Ed. A. C. Hamilton. University of Toronto Press. 409-10.
1991 年 5 月	「 <i>The Spenser Encyclopedia</i> の刊行」『英語青年』137.2 (5月号): 77.
1992 年 10 月	「スペンサーとマローウ」『イギリス文学展望——ルネサンスから現代まで』内多毅監修 杉本龍太郎・深沢俊・内田能嗣編 山口書店 49-62.
1993 年	「批評理論、スペンサー、ミルトンとして音声」『ルネッサンスニュース』13: 20-21.
1996 年 6 月	『イギリス・ルネサンス詩研究』英宝社.
8 月	「アレゴリーをめぐる」『斉藤衛教授退官記念論文集・シェイクスピア饗宴—英米文学の視座から』英宝社 437-56.
1997 年 9 月	「『妖精の女王』における構造の形成／隠蔽」福田昇八・川西進編『詩人の王スペンサー』九州大学出版会 23-37. (再録 1990.3)
1999 年 5 月	「食べること・飲むこと——スペンサー、ジョンソン、ミルトンの詩におけるその規範と逸脱——」高橋康也編『逸脱の系譜』研究社 134-48.

(上の表は、『藤井治彦先生退官記念論集』(英宝社: 2000 年)に掲載の藤井先生のエッセイ "Remembrance of Things Past" に添付されている「著作目録」(pp.1021-34) よりスペンサー関係のものを足達が抜粋して作成し、阪大英文学会第 50 回大会「シンポジウム・藤井治彦」にて資料として配付したものです。)